

町家間口方向揺れに弱さ

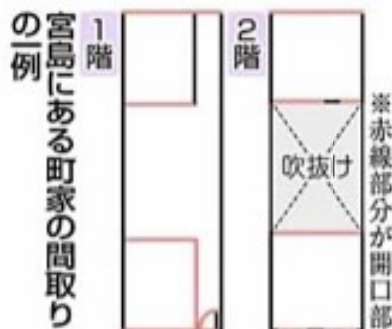
廿日市市宮島町の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）にある町家が、間口方向の地震に弱いとする調査結果を、広島工業大学院（広島市佐伯区）の研究チームがまとめた。「うなぎの寝床」とも呼ばれる細長い構造が耐震性を弱めているとし、大地震で倒壊する恐れがあると指摘している。

（八百村耕平）

同大学院をこの春卒業した黒河真 震性があるが間口方向の揺れには弱さん（24）たちが、18世紀前半から20世紀前半にかけて建てられた町家4軒を調査した。間口が短く奥行きが長い当時の典型的な建物で、壁の厚さや柱の位置などのデータを基に地震にどれだけ耐えられるか計算した。4軒全てで奥行き方向の揺れにはある程度の耐

素が少なくないと解説。ただ、西隣を似た

町家などが並ぶ宮島の通り



「うなぎの寝床」隣家と支え合い

構造の建物に挟まれた町家はより揺れに耐えられるという仮説も立て、「所狭しと並ぶ町家が互いに支え合っている可能性がある。町家は宮島の生活や文化を残すのでむやみに補強するのではなく、町並み全体で耐震性を高める考え方もできる」と提案している。

研究は、建築家たちのグループ「いつくしま・まちなみ研究会」の協力を受けて2019年度に同大が始め、22年度に市の委託事業になった。市は今後、研究結果を参考に町家の耐震性向上を含めた防災計画を練る方針としている。



宮島の町家内で調査結果を市職員たちに伝える黒河さん（左端）。部屋の奥は間口部となっている